

## 巻 頭 言

令和2年は正月早々、「中国の武漢でSARS（重症急性呼吸器症候群、2002～2003年に中国南部に端を発し、32か国・地域への感染拡大がみられた）に似た感染症が発生したらしい。」というニュースから始まりました。SARSコロナウイルス（SARS-CoV）の変種と考えられるこの病原因子はSARSコロナウイルス2（SARS-CoV2）と名付けられましたが、結果的に全世界的な感染爆発となり、3月にWHO（世界保健機関）からパンデミック宣言が出されました。日本でも初期にはなんとか防疫に成功していたように見えてましたが、3月以降の首都圏を中心とした感染拡大から全国に緊急事態宣言が出されて現在に至っています。前回のSARSでは感染者がなかった日本ですが、それはまったく偶然のことで、たまたま感染者が日本に入国しなかっただけだと考えられています（押谷 2013）。前回のSARSやMARS（中東呼吸器症候群、2012年）で被害が少なかった日本では、感染の有無に必要なPCR検査システムの不備が今回あらわになりました。本学にも、私が管理・運用しているPCR機器の貸し出しについて問い合わせが来ております。検査技術者の不足（人材育成の不備）も指摘されているところです。気になって検査マニュアルをダウンロードして読んでみましたが、確かに分子生物学実験の未経験者には難しい検査だという気がします。将来も、このような病原体による重篤な病状の世界的流行は、十分に予測できます。そのためにも対応できる人材（検査技術だけではなく、データの評価も含めた高度専門人材）の育成は急務です。

さて、このいわゆる「新型コロナ事態」は、私たちの社会に大きな変化をもたらしました。テレワークが推奨され、大学の講義もオンライン化されました。もしかすると新学期が9月になるかもしれません。「アフターコロナ」の社会はどのようになるのでしょうか。私の大学時代の友人は約1年前に会社を中途退職し、山口県の山奥に移住して民宿を始めました。ある大企業のアメリカ法人のCEO（最高経営責任者）をやっていた男です。「後半生はこれまでとは全く違うことをして、好きな場所で生きる。」つもりなのです。今後、人生100年時代になることを考えると、これまでのような1サイクルの人生設計ではなく、2サイクル（第2の人生）の人生設計という考えを持つ彼のような人間は、今後増えていくかもしれません。アフターコロナの社会が、「どこに住んでいようといつでも誰とでもつながり」、「随時、発出する仕事（プロジェクト）にその都度、最適な人間を雇用し」、「好きな時に必要な知識や技量を学ぶことができる」ように変化することで、人々は長い人生を有意義に生きることができるのではないのでしょうか。

昨年の本報告書の巻頭言を再録します。「私の考える地域の価値とは、風土、つまり自然環境に基づく社会や文化の総体の中で人々が生きていく価値です。個々のパーツごとの価値、この場合は経済力や文化的価値などの通貨指標によって一般化しやすい価値ではなく、その組み合わせの中で生きていく全体の価値です。簡単にいうと、そこで生きていくことが好ましいかどうか、という価値観です。」当センターでは、令和元年度にも鳥取県の各地域の価値を自然科学的、社会科学的に再定義することを目的として、5件の課題で研究を行いました。中でも環境学部の山本准教授による高度な化学分析データを鳥取県の農水産物のブランド化に役立てる試みは、まさに鳥取県独自の風土の価値を可視化して全世界に発信する研究です。山本准教授が可視化した価値は、経営学部の教授陣の専門知をもってより具体的に社会に伝達しなければなりません。また、そのデータはかけがえのない鳥取の自然環境を保全し、未来に残していくための基礎になるかもしれません。そのような地道な研究の総体として、鳥取県に居住して人生を送る、真の意味の「地域の価値」を定義できるのではないかと考えています。

参考文献 押谷仁（2013）小児感染免疫 25(2):185-188

令和2年5月

地域イノベーション研究センター長 吉永 郁生